

(別紙 2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 張 文良

中国の華嚴教学は法蔵（643－712）によって大成されたが、その後、澄観（738－839）によって新たな展開がなされたとされる。澄観はこのように重要な思想家であり、これまでも故鎌田茂雄博士らによる研究があるものの、その思想の核心を捉えた研究は必ずしも十分でない。それは、澄観がきわめて多数の經典注釈書を著しているにもかかわらず、その思想を体系的にまとめた著作がなく、多岐にわたる思想を的確に整理して理解することが困難だからである。そのような状況の中で、本論文は澄観の多数の著作を精読し、その核心を「心」の思想と捉え、法蔵との比較など、思想史的な面も配慮しながら、その思想の特徴を解明したものである。本論文は全 7 章からなり、第 1 章で伝記や研究史など前提となる問題を論じた後、第 2－6 章でさまざまな観点から澄観における「心」の問題を検討し、最後に第 7 章で、澄観を受け継ぐとされる宗密（780－841）への影響に説き及んでいる。

本論文では、とりわけ澄観が「法相宗」と「法性宗」を分けていることを、その思想の全体に関わるものとして注目する。法相宗は中国に伝えられた唯識系の思想であり、現象としての「識」を分析するが、それに対して澄観は根源的な「心」を立て、それを法性宗として対照させた。しかし、単純に後者によって前者を否定するのではなく、後者を基盤に前者を統合する総合的な体系を築いた。また、別の面から言えば、如来蔵・仏性説の発展でありながら、同時に空の思想をも統合している。「心」はこのように根源的な原理であるが、同時に実践主体としての性質をも有し、単なる理論に終らない実践性をもった思想の展開となっている。

本論文において、澄観の思想は、以上のように「心」の思想としてきわめて明快に捉えられている。法蔵が「理」の立場から華嚴思想を大成したのと比較して、澄観が「心」によってより実践的な体系を築いたと見ているところも適切である。また、澄観の「心」の思想は、宗密などを経て、儒学など、中国の他の思想動向にも大きな影響を与えたが、本論文は最終章で宗密との関係を論じ、澄観の思想の大きな射程をうかがわせている。

このように、本研究は澄観の「心」の思想を的確に解明したものとして、澄観研究を大きく前進させるものといえることができる。日本語も分かりやすく、特殊な術語の多い難解な文献を扱いながら、論述は比較的明快で、読みやすい。「心」と「心性」の区別など、まだ曖昧で説明不足のところもあり、原典の引用や訳にも検討すべきところがあるものの、その成果に鑑み、博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判断する。